

横浜 YMCA 学院専門学校
2022 年度 教育課程編成委員会 議事録

開催日時:2023 年 3 月 3 日(金)15:50~16:30

開催場所:本校 6 階 606 教室

参加者:奥原 孝幸・青木 英幸・三浦 美紀・遠藤 陵晃・立花 明美・山下 忠司

欠席者:上羽 航(委任状)

(敬称略・順不同)

1. 開会・校長挨拶

2023 年度より校長が青木から立花明美に変更、予算執行責任者として山下忠司が担当する。また、学科長が遠藤陵晃に変更となる。

2. 2023 年度カリキュラムについて

校長の青木より説明がなされた。

2023 年度から始まる臨床実習 V について。学生が臨床実習を行う施設の種別に規定があるためデータベース化を進め、漏れがないように管理していく。

新カリキュラム提出時(2019 年)の内容で 4 年次の授業時間数が 800 時間を満たしていなかったため、実習時間数の見直しや、「老年期の作業療法治療学」の時間数を増やしている(30 時間→60 時間)。時間数と開講時期の変更を行い、更新されるカリキュラム一覧は講師の先生方に共有していく。

2 月の理事会で承認を得たので、カリキュラム変更申請は 3 月中に神奈川県私学振興課へ提出する。

<意見交換>

奥原委員より

不足について卒業生、在校生に追加授業は必要か。

⇒ 旧カリキュラムの授業時間数の要件は確保されている。現 4 年生が旧カリキュラムの最終学年である。

新カリキュラムでの卒業生は未だいないため、2023 年度の 4 年次から 800 時間以上を確保することで問題はない。

奥原委員より

所属している大学では新カリキュラムでの臨床実習時の臨床現場での点数を明確に付けてない。学生の成長度を「種がまかれた」「芽が出た」などの表現を使用している。実習前後で個人面談を実施し、成長度合いを確認するようにしている。

セミナーの事例報告でも内容で採点はしない。SV の考えを自分で理解し発表できれば十分とする。欠席などなければ成績としては 80 点程度で付け、学内での点数が 7-8 割となる。

学生には正直な自己評価をさせ、上手いかなかったからダメという判断をさせない。

評価方法も実習に影響する。昨今の(学生の)変化をみているとそれくらいしないと合格しない。

⇒ 日本の学校教育は「良い教育の提供」を進めてきたが、いじめや不登校などあまり良い結果が出ていない。個人の成長度合いを測れる教育にシフトしていく必要があると感じている。作業療法士が現場で支援されるのと同じように、学生一人一人の「個人の課題・目標」を一つ一つクリアしていく過程に、どれだけ教職員が係わり、その専門性を生かし学校教育として噛み合っているかが一つのポイントである。

奥原委員の話の伺い、実習の評価は学校が主体となり評価して良いと感じた。

本校での成績評価において、実習評価が項目が厳しいからなのか、S 評価(90 点以上)がなかなか見受けられない。自身の成長を図れる仕組みならば S 評価も与えられるかもしれない。

奥原委員より

新カリキュラムでは、到達レベルは作業療法士(専門職)レベルを求めている。学生なので一つ手前のレベルで、考えながらでもなんとか出来れば 100 点だと思うが、現場ではなかなかそれを 100 点とは付けられない。学生レベルでの評価がどういふことを現場と擦り合わせるのが難しい。学校が学生を守ってあげないといけない。学校と現場は話す機会を多く持つべきである。

⇒ 作業療法科は他の学科に比べて実習の評価が厳しいと感じる。現場での評価が、学生個人の職業に対する自信へとつながり、ステップアップ出来るようになってもらいたい。

奥原委員より

評価項目も時代に即して変えていくことも必要である。

3. 閉会

本日いただいた意見を反映させながら、学生支援の場面で実践していけるように取り組んでいきたい。

次回委員会では、学生の成長度合いを測る評価項目等についてのご意見をいただけるようお願いしたい。

以上